

第2節 西吾妻地域における平安時代の「在地系甕」について

はじめに 西吾妻地域（註1）、とりわけ長野原町における古代集落は、9世紀中頃以降、後半～10世紀前半を主体として存在することが知られている。ここからの出土遺物を大局的にみれば、主に土器類を中心として、同時期の群馬県内の様相と極端な差は見出しがたいようである。土師器甕についてみれば、県内において普遍的に出土するのは武蔵型甕であり、本報告書中ではコの字状口縁甕と表現している甕である。これは西吾妻地域からも一般的に出土する土師器甕であるが、近年の長野原町内を主体とする発掘調査事例の増加により、コの字状口縁甕とは雰囲気の違いを資料の存在が指摘され始めている。これが西吾妻地域における平安時代の「在地系甕」とよばれる土師器甕である。

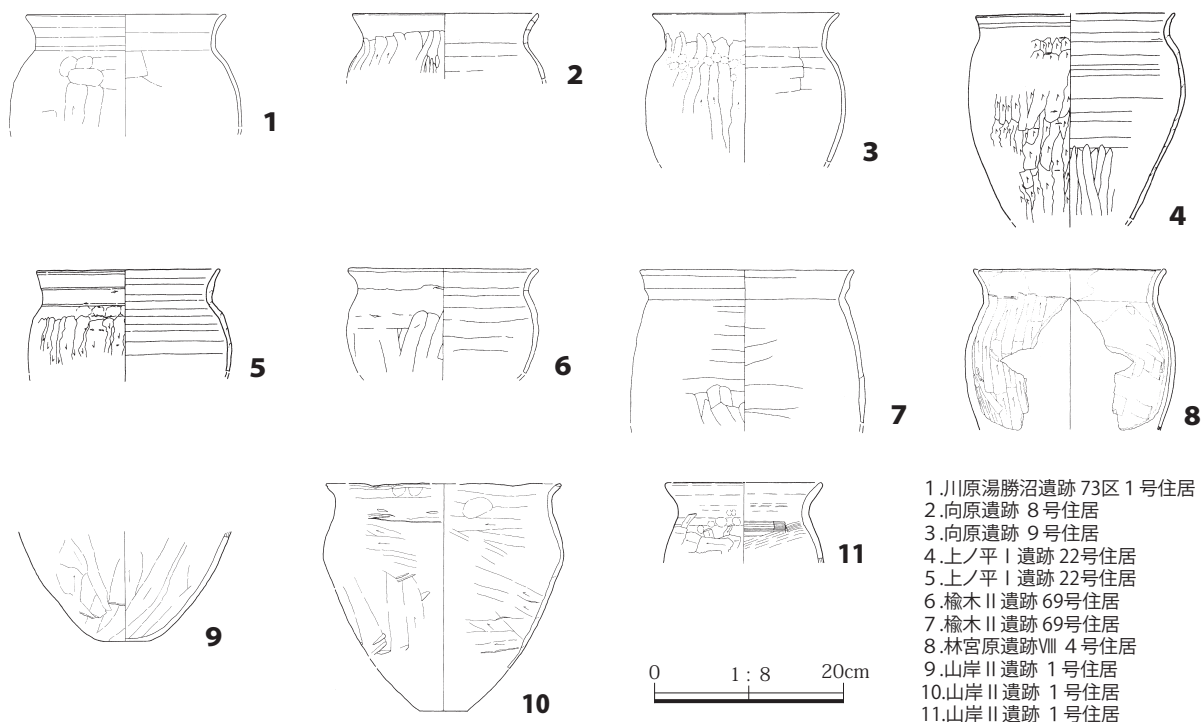
今回、本遺跡群の資料整理を進める中で、「在地系甕」に相当すると考えられる資料が認められた。そこで、本節ではこれまでに指摘されている「在地系甕」の内容について概観した上で、本遺跡群出土資料を集成して示す。さらに他遺跡出土資料の中にも「在地系甕」の可能性のある資料が認められたことから、それらの一部を示すとともに、「在地系甕」を把握するための展望をしたい。

西吾妻地域における平安時代の「在地系甕」とは コの字状口縁甕と様相の異なる甕が存在することは、関俊明氏らによる川原湯勝沼遺跡の報告書中で指摘されていた（群馬県埋蔵文化財調査事業団2005）。これは73区1号住居からの出土として掲載された土器群中の1点であり、「白色味が強い胎土と縦方向のヘラ削りが上位まで及んでいること」を特徴とする（第29図1）。その後群馬県北部、北毛地域における奈良・平安時代の土器様相についてまとめた中沢悟氏は、「平野部で多く見られるコの字状口縁の甕と同時に異なる甕が東吾妻町や長野原町では存在するようである」と述べ、「コの字状口縁の甕と胎土や色は近いが、器形がやや異なり、コの字状口縁の甕は、肩部に横方向のヘラ削りを持つが、この削りが、縦方向で、胴部から頸部まで及んでいるものが多いようである」と説明した。と同時に「県央部と共通するコの字状口縁の甕と似ているが胎土や整形方法の異なる甕」とも述べられ、コの字状口縁甕とは胎土に違いがあることも示唆された（中沢2009）。こうした中沢氏の指摘の後、富田孝彦氏は林宮原Ⅷ遺跡の報告書中で竪穴住居跡SI04出土資料としてコの字状口縁甕と共伴する縦位ケズリ調整の甕を報告し（第29図8）、「在地的な類型」として捉えられる可能性を示した（長野原町教育委員会2012）。さらに富田氏は山岸Ⅱ遺跡の報告書中で、竪穴住居跡SI01出土の土師器甕の中には「平野部の規格化された甕とは胎土や整形方法で異なっている」資料が存在することを報告し、「これらはいずれも規格外の特徴を有しており、在地化したもの」と考えられた（第29図9～11）。併せて西吾妻地域で出土した「在地系甕」を集成して提示し（第29図2～8）、「平野部で出土する規格化されたコの字状口縁甕を模倣した在地系土器の存在」を確認している。この集成図には中沢氏が前掲文中で指摘した資料も包括され、ここにおいて「在地系甕」として類例が示されることとなった（長野原町教育委員会2013）。

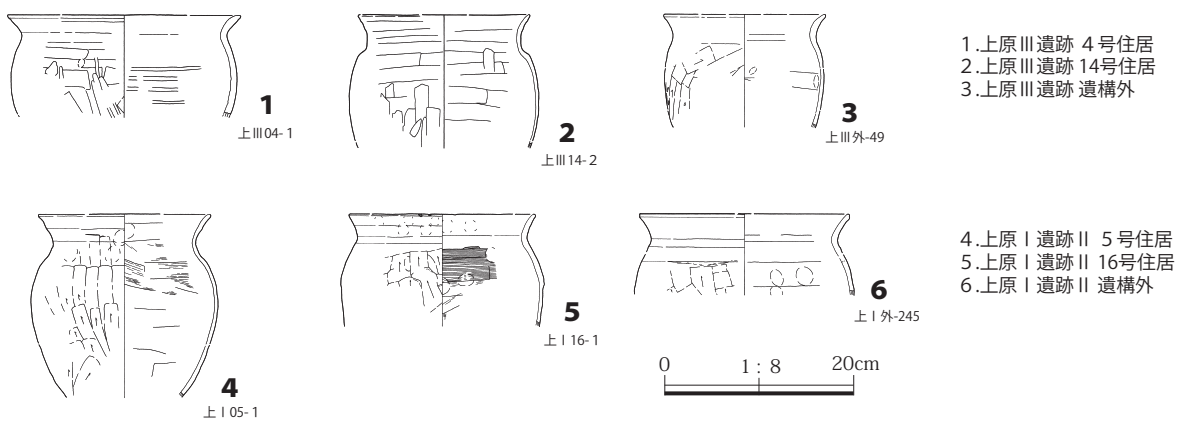
以上をまとめれば、西吾妻地域における平安時代の「在地系甕」の特徴として、コの字状口縁甕に対して次のような違いが挙げられる。

- a. 器形の違い。県内で出土するコの字状口縁甕とは器形がやや異なる。
 - b. 整形方法の違い。コの字状口縁甕が肩部に横方向のヘラケズリをもつのに対し、肩部のヘラケズリが縦方向のもの。この縦位ヘラケズリは、胴部から頸部に及んでいるものが多いようである。また実測図の観察からは、縦位ヘラケズリが肩部まで及ばないものは、肩部に横位のナデ痕跡を残すように見える。
 - c. 可能性としての胎土の違い。胎土については不明な点があるが、白色味が強い胎土の資料が存在する。
- コの字状口縁甕に対しての違いは、上記の全てが該当するもの、あるいはその一部のみ該当するものがあるようだ。そして「在地系甕」を定義付けるには未だ抽象的なきらいがあるが、このような観点から本遺跡群出土資料を検討した結果、いくつかの「在地系甕」を把握するに至った。

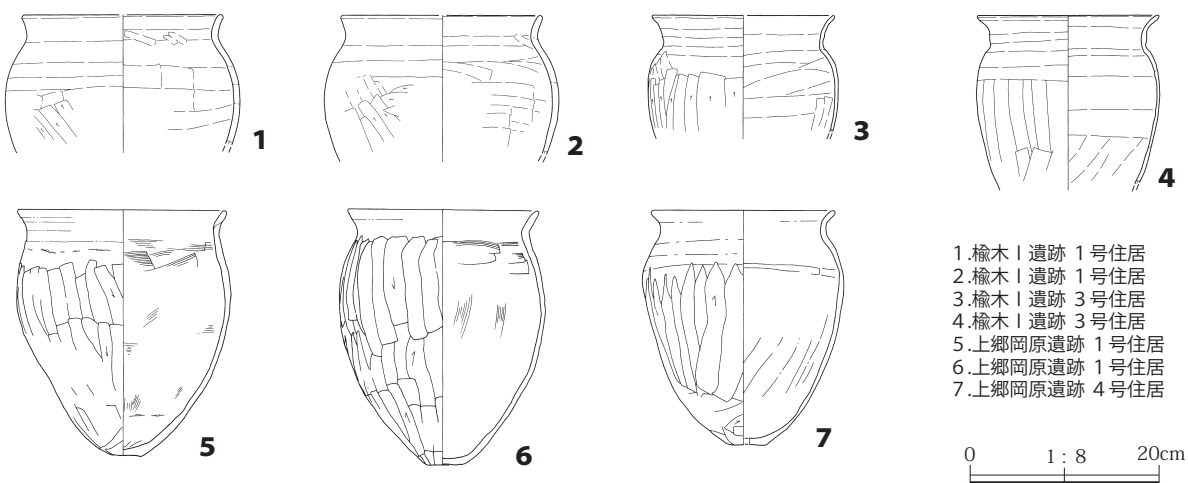
本遺跡群出土の「在地系甕」 今回調査した遺跡群の中で、平安時代に相当する竪穴住居跡を検出したのは



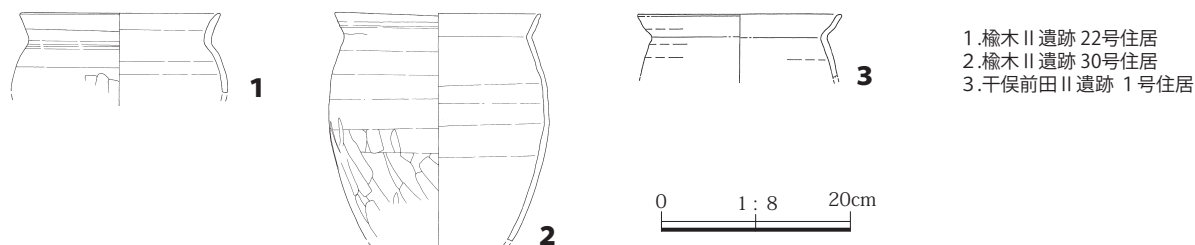
第29図 西吾妻地域における平安時代の「在地系甕」(1/8)



第30図 本調査出土の「在地系甕」(1/8)



第31図 他遺跡出土の「在地系甕」(1/8)



第32図 西吾妻地域出土のロクロ口甕 (1/8)

7 遺跡中 4 遺跡である。具体的には中棚Ⅰ遺跡・上原Ⅲ遺跡・上原Ⅰ遺跡Ⅱ・上原Ⅳ遺跡Ⅳの各遺跡であり、これらの集落は 9 世紀中頃以降、9 世紀後半～10 世紀前半を時期的主体とする。この傾向はこれまでの長野原町内での調査成果と一致をみる。本遺跡群からの出土遺物の中で、「在地系甕」として本報告書に掲載したのは合計 7 点、上原Ⅲ遺跡の 3 点と上原Ⅰ遺跡Ⅱからの 4 点である。中棚Ⅰ遺跡や上原Ⅳ遺跡Ⅳからも「在地系甕」の可能性のある資料を確認しているが、小破片であるがゆえに不明瞭な部分があり、今回は非掲載としている。

本報告書に掲載した「在地系甕」の中から、ある程度器形を知りえる 6 点の資料を集成したのが第 30 図である（註 2）。上原Ⅲ遺跡・上原Ⅰ遺跡Ⅱともに、それぞれ竪穴住居跡出土の 2 点、遺構外出土として扱った 1 点を図示した。竪穴住居跡出土の計 4 点は、本章第 1 節によれば 9 世紀後半～10 世紀前半の帰属として把握している。

図示した資料では口縁部から底部まで、全形を復元できる資料は皆無で、全て体部上半に相当する破片資料である。各資料の詳細は本報告書掲載の遺物観察表に依られたいが、全体的に概観すればコの字状口縁甕とは器形が異なる。外面の調整方法では、第 30 図 4 や 5 のように、肩部から頸部、あるいは頸部直下まで縦位の調整が施される。5 は粗い縦位のヘラケズリである。4 はヘラケズリというよりも、縦位ヘラナデと判断した弱めの調整痕である。従来「在地系甕」の特徴として、肩部への縦位ヘラケズリが指摘されていたが、縦位ヘラナデの資料も存在すると考えられる。一方で第 30 図 1・2・6 では体部に縦位主体の調整痕が認められるが、肩部には及ばない。1 と 2 はヘラナデ、6 がヘラケズリと観察している。これら 3 点にはいずれも肩部に横位のナデ調整が残され、2 についてはヘラナデと判断した。なお、1 についてロクロ口甕である可能性も考えている。3 は体部に縦斜位ヘラケズリを施し、連続して肩部では横斜位ヘラケズリになる。コの字状口縁甕の調整に近い印象を受けるが、口縁部形態に違いがあり、白色味のある色調が特徴の資料である。

周辺遺跡からの出土例 前述したように、西吾妻地域の「在地系甕」は富田氏によって集成されている。今回当地域に関わる発掘調査報告書を確認したところ、富田氏の集成資料に加えて、「在地系甕」の可能性のある資料をいくつか見出した。これには吾妻溪谷の東側の地域、東吾妻町の遺跡から出土した資料も含めており、中沢氏によってすでに示された資料もある（註 3）。「在地系甕」と判断するにあたっては、全て報告書掲載の実測図の観察に依り、直接的に資料を実見したものは無い。そのため現段階では検討資料としての可能性の提示に留まる。第 31 図はそれらの一部を集成したものである。コの字状口縁甕とは異なる器形、肩部から頸部の縦位ヘラケズリ、あるいは胴部の縦位ヘラケズリと肩部の横位ナデなど、今のところ「在地系甕」の特徴としてとらえられよう。

今後に向けて 現在、「在地系甕」はコの字状口縁甕が在地化したもの、との見方がある。一方で、同時期の西吾妻地域では榎木Ⅱ遺跡や千俣前田Ⅱ遺跡などで大型ロクロ口甕の存在を認めることができ（註 4・第 32 図）、非掲載ながら、小破片レベルでは本遺跡群からの出土も確認している（註 5）。隣接する長野県上田・佐久地域などの東信地域では、9 世紀以降ロクロ口甕たる北信型甕が出現し（註 6・小林 1989）、後半には主体的になっていくようだ。同時期の西吾妻地域には、この地域を介在して、客体的ながらも一定量の北信型甕が存在する可能性がある。そうであれば、「在地系甕」の存在に東信地域経由の北信型甕の影響は認められないのか、あるいは「在地系甕」として把握される資料の中にそれそのものはないのか、注意して観察する必要が

ある。ロクロ甕との関連性で言えば、今回「在地系甕」に含めた「肩部横位ナデ、胴部縦位ヘラケズリ」の資料には注目しておきたい。肩部を含めた頸部付近まで縦位ヘラケズリ（あるいはヘラナデ）が及ぶ一群とは分けられる可能性があり、これらがロクロ甕そのものであることを予想したいからである。一方で「在地系甕」の実態がいまだ不鮮明な現状では、コの字状口縁甕やロクロ甕たる北信型甕の影響の可能性以外に、別の要素も除外できないであろう。林宮原遺跡Ⅱ（長野原町教育委員会 2004）の「北陸系」、花畑遺跡（群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002）の「北陸、信濃系か」と報告される土師器甕の存在も気にかかる部分である。

さらに、その分布についても注意を払っておきたい。「在地系甕」の主たる分布域は西吾妻地域であると考えられるが、一部は東吾妻地域にまで及んでいる可能性が高いからである。東西を含めた吾妻地域全体での分布状況も、把握すべき課題であろう。長野原町を主体とする西吾妻地域や東吾妻地域の一部は、芋引金具や凸帯付四耳壺、あるいは大小のロクロ甕、黒色土器など、長野県域に分布する遺物の出土が目につく地域である。こうした遺物の分布状況と「在地系甕」の分布状況がどのようなものであるのか、検討しておきたい部分である。

おわりに 以上のように、西吾妻地域における平安時代の「在地系甕」は本遺跡群からも出土しており、他遺跡からの出土資料もその類例に追加できる可能性を示した。今回、本遺跡群出土資料以外に実見したものは皆無で、ここに本節での考察上の限界がある。「在地系甕」の評価は今後に委ねられているが、まずは詳細な観察による実態把握が望まれる。そして、「在地系甕」が存在するとすれば、より具体的な定義付けが求められることは言うまでもなく、その上で「在地系甕」の系譜を跡付けることが重要と思う。

註

- (1) ここでいう西吾妻地域とは、現在の吾妻郡西部、長野原町・草津町・中之条町六合地区（旧六合村）・嬭恋村を包括する地域のことである。およそ吾妻渓谷を境として、その西側の地域として認識している。西吾妻地域では長野原町での発掘調査が突出して多く、これは八ッ場ダム関連の調査が多いことによる。比べて他町村の調査事例は少ないため、ここで扱う西吾妻地域の様相とは、いきおい長野原町を主体としての様相を示すことになる。
- (2) 本報告書掲載の7点のうち集成から省略した1点は、上原Ⅰ遺跡遺構外-251の口縁部小破片である。
- (3) 上郷岡原遺跡の2点（第31図5・6）が、前掲（中沢 2009）の編年図中に配置されている。
- (4) 楡木Ⅱ遺跡は長野原町、干俣前田Ⅱ遺跡は嬭恋村に所在する。各報告書中においては、第32図2以外は「ロクロ甕」として掲載されているものではない。今回、これらの資料を実見したわけではないが、実測図の観察からロクロ甕として判断した。
- (5) 本遺跡群からの大型ロクロ甕は上原Ⅲ遺跡・上原Ⅰ遺跡Ⅱで確認しているが、小破片であり今回は非掲載である。同様に非掲載ながら、中棚Ⅰ遺跡の竪穴住居跡 SI04 からも肩部相当の破片を確認している。
- (6) 小林真寿氏によれば、東信地域に分布するロクロ甕について、「北信型」の影響下に出現することはたしかであり、大局的には同一視されようが、しかしそこには無視しえない差異が存在する」ことを指摘している。

引用・参考文献

- 小林真寿 1989 「所謂「北信型の甕」を考える」『佐久考古通信』No. 49 佐久考古学会
- (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2002 『八ッ場ダム発掘調査集成(1)』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2集
- 2005 『川原湯勝沼遺跡(2)』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第6集
- 中沢 悟 2009 「第5章2 北毛における奈良・平安時代の土器の様相について」『細谷B遺跡』一般県道岩下線道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・日本道路公団
- 長野原町教育委員会 2004 『林宮原遺跡Ⅱ』長野原町埋蔵文化財調査報告 第14集
- 2011 『林宮原遺跡Ⅷ』長野原町埋蔵文化財調査報告 第23集
- 2013 『山岸Ⅱ遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告 第24集